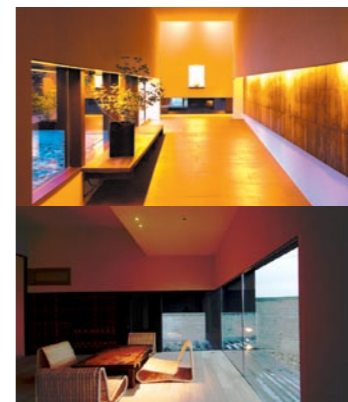


# “北海道力”の発見

農業と観光。数ある北海道の魅力のなかでも特に人々をひきつけてやまない2つの要素である。その魅力を最大限、人々に伝えるため、そしてさらなる進化のため、努力を続ける人を訪ねた。



## “滞在を楽しむ” いま泊まりたい 新しい北海道の宿



窓の位置が低く、周囲を意識させない。客室は、ゆったり座って過ごすことを意識した造りに。

リニューアルした登別の「望楼NOGUCHI登別」、そして昨年は江差に木造平屋の「群来(くき)」を手掛けた。いずれもハイシーズンにもなれば予約を取るのが難しい、人気旅館である。

「滞在そのものが楽しめる宿こそ、また出かけたかった」と思わせる旅館だと思えます。そのために、宿泊する人がその土地の歴史風土を体感できるように設計するようにしています」

今月開業一周年を迎えた「群来」のある江差町は江戸時代、にしん漁で栄え、「江差の五月は江戸にもない」と言われたほどの繁栄を誇った町。宿の名前は、にしんが押し寄せることを「群来る」と言ったことに由来する。中山さんは、玉石や杉など地元の材料を使い、敷き詰めた石を海の波に、杉板を巡らせた

### 宿泊客に土地の歴史と風土を伝える



群来では、近郊25キロ以内で生産・収穫された食材にこだわる

建物を船に見立てた。すぐ後ろに海が控えたこの地ならではの、海を連想させる設計だ。「北海道で生まれ育った私も、江差に来て驚きました。それほど歴史と文化を持っているとは知らなかった。道外から訪れる人々にはもちろんですが、北海道の人にも新しい発見をぜひしてほしい」

オーナーの棚田清さんも志を同じくする。最も時間を割いたのは、従業員に江差の歴史を教え込むことだと言う。「お客様に土地のことや食材を聞かれ、分かりませんではすみません。この江差でもおもしろいところがあるので、地元の方にも先生を講師に招いて、江差の歴史風土について勉強しました」

結果、「群来」はこれまでの北海道の観光客とは異なる層の客を取り込んだ。客室は全7室でいずれもベッドルームにリビング、温泉かけ流しの風呂と広々とした造り。客室でゆったりと過ごす客が大半で連泊も少なくない。滞在そのものを楽しみたいという客が全国から集まっているのだ。

宿泊単価は1人4万円台と決して安くはない。だが、オープン以来問い合わせが後を絶たないのは、こうした宿が待ち望まれていたからに違いない。

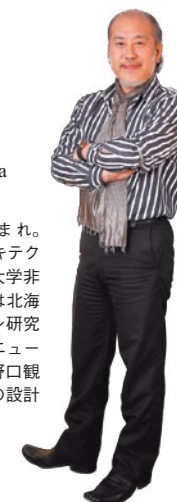


小樽の歴史をイメージした「藏群」(上)と、大型ホテルの客室を減らしゆとりの空間を確保した「望楼」(下)。

海に浮かぶ船のように見える「群来」。中央は北海道出身の彫刻家安田侃の作品。敷地内からは良質の天然温泉が噴出。全館の給湯や床暖房、ロードヒーティングはすべて温泉を使用。無農薬有機栽培の直営農場では地鶏や羊は循環型飼料でエコ飼育をしている。

### 江差旅庭 群来

北海道檜山郡江差町字姥神町1番地の5  
TEL 0139-52-2020  
<http://www.esashi-kuki.jp/>



Makoto Nakayama  
中山真琴  
1955年北海道生まれ。88年ナカヤマアーキテクト設立。北海学園大学非常勤講師。08年には北海道都市文化デザイン研究所所長に。今秋リニューアルオープンする野口観光の函館のホテルの設計も手掛けている。